

シリーズ「遺跡を学ぶ」

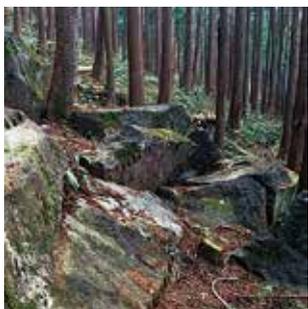
132

戦国・江戸時代 を支えた石

小田原の石切と 生産遺跡

佐々木健策

新泉社



戦国・江戸時代を

支えた石

―小田原の石切

と生産遺跡―

佐々木健策

【目次】

第1章 小田原の石の文化

4

1 石を「土産」にする村々

4

2 石を見立てる人びと

6

3 箱根火山の恩恵

10

〈コラム〉箱根火山と石材

12

第2章 中世の小田原石切を追う

15

1 中世の石材加工場の発掘

15

2 石材はどこから

20

3 すばらしい加工技術

25

4 大量生産、大量流通の時代

35

第3章 江戸城築城と小田原の石丁場

41

1 早川石丁場

41

2 切り出し作業の復元

47

3 江戸城のどこに使われたのか

57

4 大御所隠居城計画と石丁場

65

〈コラム〉石切図屏風の世界

70

第4章 小田原石切のルーツとその後

74

1 小田原石切のルーツ

74

2 戦国を生き抜いた石切棟梁たち

77

3 その後の石丁場

83

第5章 石が導く歴史への招待

87

編集委員

勅使河原彰（代表）

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵

参考文献

91

表1・小田原藩政と採石

| 村名 | 石名 | 記載内容 |
|-------|-------|---|
| 米神村 | 根府川石 | 西山より産す、此石は隣村根府川と当村の両処のみ産し、他村には絶てなき所なり |
| 根府川村 | 根府川石 | 西山より産す、石理尤緻密にして、且堅牢、年所を經れど剥落するの患なし、故に碑石或は庭中の飛石などに専ら用いる、此石他邦に産することなし、当村及隣村米神兩村接界の所より産するのみ、実に当国土産の第一と謂つべし、此石の形、剥殺せし如く見ゆれど、左にあらざ、山腹砂石中に瘞りて生ぜるを、其まゝ穿出して用材に充つとなり |
| | 荻野尾石 | 西山の内宇荻野尾山より産す、是も堅牢にして小松石の類なり |
| | 磯朴石 | 海岸に生ず、俗黒朴石と唱へ、仮山の石に用いる |
| 江ノ浦村 | 江ノ浦玄蕃 | 西山に産す、江ノ浦玄蕃と唱へ、石理堅牢なり |
| 岩村 | 小松石 | 小松山より産するを以て此名あり、石理至て緻密にして、且堅牢、剥落の患なし、故に碑石に用い是を最とす、故に古より御宝塔にも是を用らると云、又御三家方及松平阿波守の采石場あり、是は寛永二年よりの事と云、されば村内宍戸農民の半に過 |
| 真鶴村 | 石 | 海岸に産す、敷石礎石髻石等に、用いるものなり |
| 土肥吉濱村 | 石 | 西北山中に産す、石理尤堅牢なり、小松石の類なり、山中に尾張殿の采石場あり |
| 土肥門川村 | 石 | 走湯山嶺より産す、村民農隙に専ら采石して、都下にも□げり |

注『新編相模国風土記稿』より作成（新字体新仮名づかいに改めた）。



根府川石

小松石

図1・特産品の石

古くから用いられた石にはさまざまな特徴がある。人びとはその特徴をとらえて適材適所に用いてきた。『新編相模国風土記稿』にもその特徴が記されている。

1 石を「土産」にする村々

江戸時代後期、日本の各地でそれぞれの土地の自然や産物、名所などをまとめた地誌がさかんにつくられた。現在の神奈川県の大分部を占める相模国でも、一八四一年（天保一二）に『新編相模国風土記稿』が編まれた。

この『新編相模国風土記稿』には「土産」という項目があり、なかには「石」を土産として記す村がある。まさか石を手土産にはしないだろうから、特産品のことと思われるが、本書でとりあげる相模国西部（現在の神奈川県西部、足柄下郡）では、じつに七つの村が石を土産としている（表1）。そしてここには「根府川石」「荻野尾石」「磯朴石」「江ノ浦玄蕃」「小松石」といった特産品らしい銘柄も記されている（図1）。

たとえば「根府川石」は、小田原市の南、根府川・米神にまたがる山から産出される緻密で

第1章 小田原の石の文化

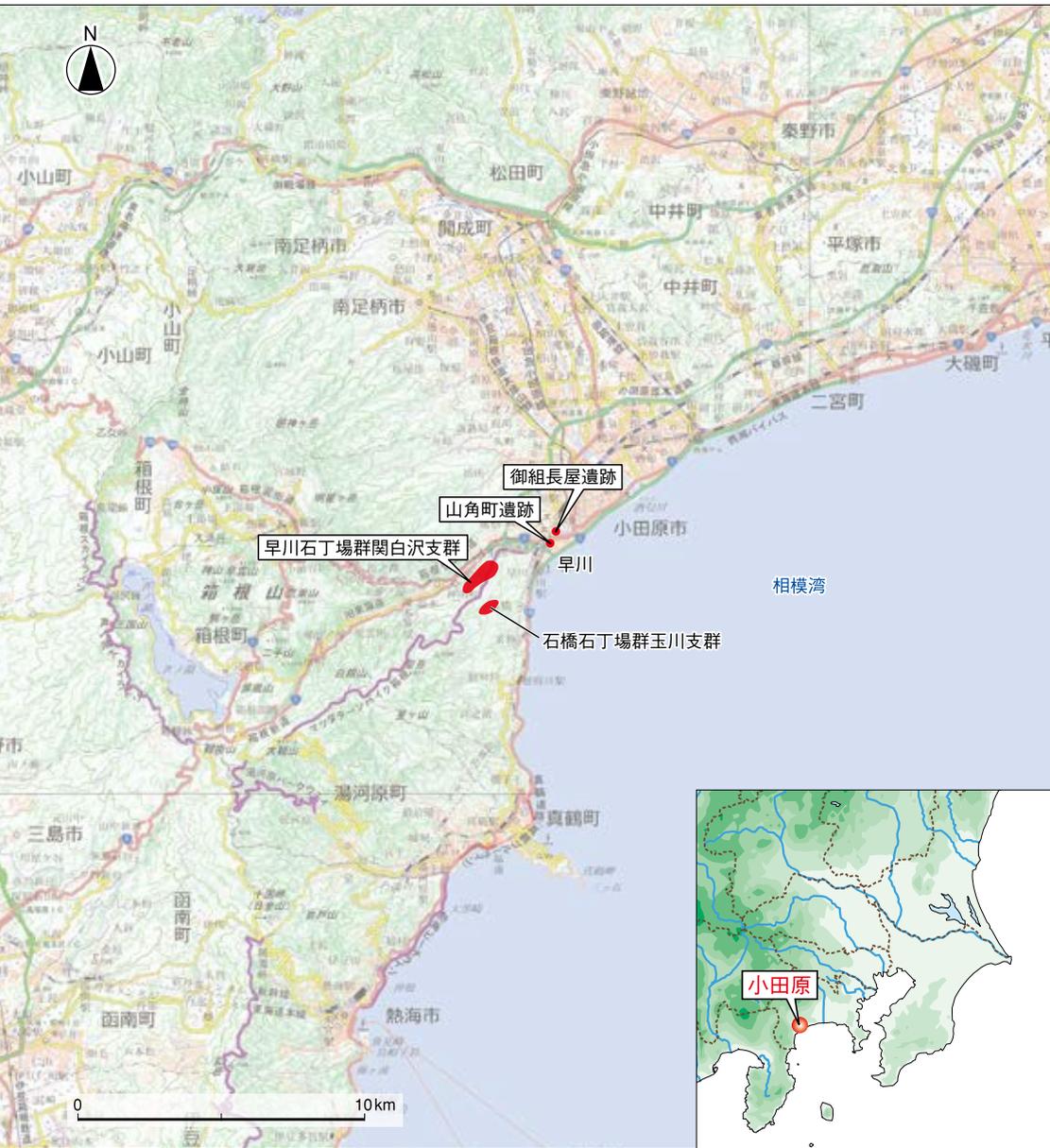


図2・小田原とその周辺図

箱根火山の麓に位置する小田原は関東地方の入口にあたる。現在も小田原駅には鉄道5社が乗り入れる交通の要衝である。

2 石を見立てる人びと

小田原は神奈川県南西端に位置する。南には広大な相模湾が広がり、西は峻険な箱根山に
つらなる山地となっている(図2)。この小田原は、『新編相模国風土記稿』が記されるおよそ

硬い石(安山岩)で、長年たっても剝落しにくく、碑石や庭石に用いられたという。縄文時代にも敷石住居などに使われていて、現在でも石碑や庭石として人気の石材である。
また、「小松石」は現在の真鶴町岩にあたる岩村特産の石(安山岩)で、古くから石碑や宝塔に使用されていた。江戸時代には城郭や御台場の石垣などにも使われ、現在では墓石などに用いられる高級石材である。

このほかにも、小田原市西部にあった風祭村の項には、昔は村内の石切山から採石して「小田原石」として出荷していたという註記がある。現在「小田原石」は採掘されていないが、この石は「風祭石」「水道石」ともよばれる溶結凝灰岩で、小田原城とその城下町の発掘調査では、暗渠の石組水路などに使われている状況をよくみかける。

このように『新編相模国風土記稿』からは、相模国西部、小田原とその周辺の村々がさまざまな石材を産出する地域であったことがわかる。石はさまざまな名前によれば、それぞれの個性に合わせて選択され、人びとの暮らしに供されてきた。石はわたしたちにとって、古くからもっとも身近な材料の一つなのである。

三百年前の戦国時代、関東一円を支配する小田原北条氏（後北条氏）の本拠地であった。小田原北条氏は、北条早雲として知られる伊勢宗瑞が一五〇一年（文亀元）までに小田原城に進出し、豊臣秀吉が天下統一を確実なものとする一五九〇年（天正一八）の小田原合戦に至るまで、五代（宗瑞・氏綱・氏康・氏政・氏直）約百年にわたって関東に覇をとらえた。

この小田原北条氏に関する文書は、関連文書まで含めると五〇〇〇通以上が残っているといわれており、そのなかには石材加工に関する文書もいくつかある。そのなかの一つが下記の文書である（図3）。

土肥御屋敷うしろの山石、此度善左衛門見立申切石、御土蔵之根石に、南条・幸田如申切之可申候、公用義、自兩人前請取可申者也、仍如件

辰九月五日

丹後奉之

石切 左衛門五郎
同 善左衛門

これは一五六八年（永禄一一）に、石切（石工のこと）の棟梁である左衛門五郎と善左衛門に、土蔵の根石として、善左衛門が見立てた土肥御屋敷裏の山石を切り出すよう命じた文書である。土肥御屋敷とは、現在の神奈川県湯河原町に比定されており、地質的には安山岩あるいは凝灰岩を産出する場所である。

「善左衛門見立」とあることから、善左衛門という人物は小田原北条氏の命により、石を適切に選択できる鑑定眼をもった職人であったことがわかる。そして、領主は石の重要性を認識しており、石を見立て・加工する能力のある職人を重用したのである。

この後、左衛門五郎および善左衛門には石を運ぶために伝馬手形が支給され、さらに一カ月後の一〇月一六日にも石の切り出しが命じられている。

このように西相模地域は石を産出する地域というだけでなく、用途に応じて石を見立てる職人が住む地域でもあった。広大な平野が広がり、硬質な石材を産する山岳地帯の少ない関東地方では、この地域はまさに宝の山であり、時の権力者、小田原北条氏にとって重要な資源であったのである。

天保年間の『新編相模国風土記稿』に石を特産品と記すことができたのは、このような職人の系譜があったためであろう。

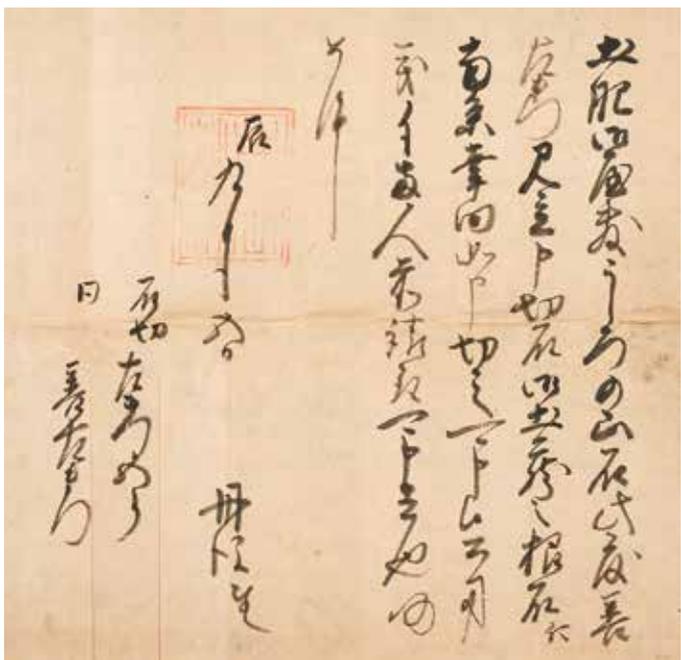


図3・北条氏康朱印状（永禄11年9月5日）
隠居した三代氏康は、「武榮」という印判を用いて、村々に宛てて書状を発給した。石切に対しても同様であった。

3 箱根火山の恩恵

西相模地域が石を特産品とする背景には、天下の険とも謳われた箱根火山の存在がある（図4）。箱根火山が活火山であることは、著名な箱根七湯の存在や二〇一五年に硫黄香る大涌谷で小規模噴火があったことから明らかである。

しかし、古期外輪山と新时期外輪山がとりかこみ、広いカルデラ内に中央火口丘と芦ノ湖があるという箱根火山の複雑な地形が、どのようにできあがったのかが明らかになってきたのは、つい最近のことといっても過言ではない。

かつては富士山のように、裾野が広く頂上に近づくにしたがって急斜面となる円錐形の成層火山が噴火し、その後、中央部が陥没してカルデラが形成され、さらに小規模な噴火が起こったことで、カルデラ内に中央火口丘が成立したと考えられていた。ところが、近年の研究成果により、箱根火山はかなり複雑な火山活動のくり返しによって形成されたことがわかってきている。

近年の研究で明らかになった箱根火山の形成過程は、四〇〇二二万年前に、後の外輪山を形成する活発な火山活動が起こり、二三〇一三万年前までに箱根火山中央に巨大なくぼみができ、カルデラが形成された。その後、一三〇八万年前にカルデラのなかで珪長質マグマが噴出する前期中央火口丘形成期があり、四万年前以降に神山や二子山、駒ヶ岳などが形成された後期中央火口丘形成期となったというものである。

こうして時期・場所の異なる多くの火山噴火が起こったことにより、それぞれの噴火による噴出物は少しずつ異なり、それぞれの場所に個性的な組成を示す岩石ができあがった。つまり、箱根火山の火山活動により形成された西相模地域から伊豆半島北部では、地域によって、その場所の溶岩を生みだした火山が異なり、その火山の違いが石の違いとなっているのである（コフムト参照）。

『新編相模国風土記稿』に「土産」としてとりあげられた石も、このような溶岩グループの違いによる個性を示したものであり、産出地の名称を冠したそれぞれの石は、まさに箱根火山の恩恵による特産品なのである。



図4・箱根火山

瀧廉太郎作曲の「箱根八里」で「箱根の山は天下の険……」と唱われ、正月の大学駅伝ではきつい登り坂のある場所として有名な箱根。約65万年の火山活動の歴史のなかで数多くの火山灰を降らせた活火山なのである。